
VISITOR

響かほり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VISITOR

【コード】

N3500Y

【作者名】

響かほり

【あらすじ】

幼馴染で家がお隣同士の^{あもつかおり}天羽香と、^{みなもとたすく}皆本祐。俺様な祐にいつも振り回される香は、いつものようにバイト帰りの祐の為に夕食を用意して待っていた。けれど、時間になっても帰ってこない幼馴染。その彼から電話がかかってくるが…

高校生の香を突如、襲う恐怖を描いたスプラッター系ホラーの『VISITOR』と、その後日談を書いたホラーは設定だけな祐視点のラブコメ『俺様ゾンビはお莫迦が大好き』の二編を収納予定。

VISITOR 1 (前書き)

このお話 (VISITOR) は、スプラッター系ホラーで、些か残酷な描写が過ぎます。

VISITOR 1 を読んで、これは駄目だと思われる方、想像力豊かでスプラッターが苦手な方、申し訳ございませんが速やかに Back でお願ひします。

VISITOR 2 はスプラッターやホラー映画がバツチ来いな御方のみ、お進みください。

尚、VISITOR を読まなくても、『俺様』の STORY には一切、差し支えございません。

VISITOR 1

鼻歌を歌いながら、あもつかおり天羽香は火にかけたシチューをおたまで焦げないようにかき回す。

「…それにしても遅いなあ、たすく祐」

幼馴染で、同じアパートの隣に住んでいる皆本祐みなもとが約束の時間になっても来ないので、香は思わず呟いていた。

香は母子家庭、祐は父子家庭。お互いに片親で、隣同士だから小さい頃はよく夜勤の仕事で親が留守になることが多い互いの家の都合もあって、どちらかの親が居ない日は、一緒に食事をするようになった。

それが小学三年生の時で、高校二年生の今に至るまで続いている。奇しくも、高校も同じ所に通っている祐の弁を引用すれば、『飯の準備が面倒くさいから、毎日俺の為に用意しやがれ』。

イケメンは性格が悪いと、香は常に思う。

最近、両親の不在を問わずに毎日食べにくるところか、昼の弁当まで要求する図々しい幼馴染の所為で、祐のファンと言う女子たちに、香は学校でねちねちとした嫌味や嫌がらせを受けている。

“どんな俺様よ、あいつ…何時か弓的にしてやる”

と、素直に料理を作りながら香がいつも思っているのは、祐には秘密だ。

そうは思っているても、約束した時間には必ず戻って来る相手が、三十分も帰りが遅くなることはなかったので、流石に心配にはなる。

三十分ほど前には、異様な台数の緊急車両のサイレンが遠くから鳴り続けていたので、余計に。

ガスの火を止めて、携帯電話を取り出した香は、祐の携帯電話ナンバーを着信履歴から見つける。コールボタンを押そうとした瞬間、タイミング良く相手から電話が鳴る。

一瞬びくつとなった香だが、気を取り直して電話に出る。

「もしもし？今何時だと思ってる訳？」

開口一番、可愛げもなく相手に言い放ったが、相手側はしばらく無言だった。

「…祐？」

『カオリ…ミツケタ』

それは、幼馴染ではない知らない女の声。それも、喉が潰れた呻き声の様な声。

粘着質で猟奇じみた不快感を煽るそれに香は、異常性を感じて背筋が凍る。

『…オマエエ、コロオス』

思わず香は震える手で通話を切った。喉がカラカラに干上がって、上手く息もできない。

悪戯にしては性質の悪い冗談。そして、香はこの手の冗談が最も怖くて嫌いだった。

「うう…祐の奴…こ、こんな悪戯して…絶対許さないっ！」

怒りながらも、恐怖で震えが止まらない香の耳に、鍵が開いて扉

が開く音が届く。

位置的に祐の家だと気付いた香は、そっと玄関を開いて右隣の幼馴染の家をみる。

が、其処を見て香は眩暈を覚えた。

生臭い匂いと共に目に入った隣の家の半開きの玄関先には、夥しい血の痕。真新しいそれは、ドアノブにも玄関の扉にも擦り付けられている。

恐る恐る地面の血の跡を辿れば、道路の先まで続いている。

“こつ言つの、大っ嫌いなのにっ!”

出来れば気絶したい。このまま、何もなかったかのように、この気色の悪い一連の事を忘却の彼方に捨て去りたいと香は思った。

しかし、これが本物の血なら、皆本家のどちらかが大怪我を負っている事になる。

恐いけれど無視もできず、意を決して香は隣の家の前に来る。

半開きの扉から見える部屋の中は薄暗く、様子を窺うことはできない。

「…くそっ…つてえ…」

そう遠くない部屋の中で、聞き慣れた男の声がする。でもそれは、痛みを堪え喰いしばったものの様に聞こえた。

「祐!？」

恐怖も忘れて、思わず真っ暗な部屋の中に飛び込んだ香は、電気をつけようとした。

しかし、その手を不意に掴まれて、壁に体を叩きつけられた。

咄嗟に悲鳴を上げようとしたが、口を塞がれる。血の匂いがする

滑りとした大きな手に。

「声出すな…それから、電気点けんな」

間近で絞り出すように呟かれた言葉に、香は何度も頷く。すると口元の手はするりと離れる。

「このまま家帰れ。家中の鍵閉めて、外出るな。誰も入れるな」

相変わらずの上から口調にはむっとしたけれど、少しだけ暗闇に慣れて、ぼんやりと相手の顔を見た香は息をのむ。祐は眉間に皺をよせ、左腕を押さえながらフラフラとバスルームに向かって歩いていく。

彼に触れた口の周りは、血なまぐさい匂いがして、触ればぬるりとした嫌な感触。

祐が怪我をしていると、香は確信する。

「祐、どこ怪我したの？」

光の無いバスルームの前で、制服のワイシャツのボタンを外していた祐は、入り口でそう尋ねてきた相手に視線を向ける。

「堂々と覗くな、痴女」

「だ、誰が痴女よ！怪我の手当てするから、さっさと着替えてうちに来なさいよ！」

相変わらずの相手に怒りながら、香はそう言い残してさっさと自分の家に戻った。

だから香は気付かなかった。

「こんなもん、見せられる訳ねーだろ」

そう力なく咳いた祐の声を。

そして、壁にもたれたまま、ずるずるとへたり込んだ祐の、刃物で深く切りつけられた左腕と、その手で押さえられた右脇腹の止まらない夥しい出血に。

VISITOR 2 (前書き)

些か、描写にエグイシーンがございます。
そう言った物が苦手な方は、ご遠慮ください。

VISITOR 2

十

それから祐が香の家に来たのは、二十分後だった。それは香が自分の顔と服に着いた祐の血を落とすのにかかった時間と、ほぼ同じだった。

「とりあえず、シチュー食わせろ」

「はあ？傷の手当てが先に決まってるでしょ」

やっと来たと思えば、遠慮もなく食事をたかる男に救急箱を開いて待ち構えていた香が呆れる。

「手当てしないなら、ご飯抜き」

「…ちっ」

食事が絡めば主導権は何時だって香の方。

ムスツとしたまま腕を差し出した祐の肌の色が、いつもより白い気がした。傷は十センチ程度、皮膚がぱっくりと裂けている。

既に血は止まっているが、結構深い。

香はその傷に眉根を寄せ、彼の腕を取った。が、その腕の異常な冷たさに驚く。

「つめたっ！」

「水風呂浴びた。で、血も止まった」

「…確かに血は止まってるけど…病院行った方がいいんじゃないのこれ？」

「めんどくせえ」

その一言で片づけた相手に溜め息を漏らし、念のために消毒液で傷を消毒し、ガーゼを当てて包帯を巻く。

「喧嘩でもしたの？」

「ストーリーカーに襲われた」

「チャラ男だもんねえ、祐さんは」

棘のある言い回しで、日頃の恨みを^{やぶ}揶揄した香に、祐は鼻で笑う。

「なんだ、妬いてんのか？」

「自惚れ過ぎ。いい加減に彼女を一人に絞ってよね。とぼっちりでいい迷惑よ」

むっとした香は、包帯を結び終えた腕を軽く叩く。祐は大袈裟に痛がって見せたあと、鼻で笑う。それは自嘲だった。

「惚れた女には何度も振られ続けてる」

「へえ…あんたを振る女っているんだ。世の中、捨てたもんじゃないわ」

「どつという意味だ」

「そのままの意味よ。それ、ちゃんと警察に届け出しなさいよ？」

救急箱の中に広げたものを片付けて、立ち上がるうとした香の手を、祐が握って止める。

新手の嫌がらせかと香は思ったが、自分より高い位置から見下ろして来る幼馴染の表情が、何かを堪える様に歪む。

「あ、痛み止め欲しかった？」
「違う」

無然と呟いた祐に、香が首をかしげる。

「…あ、そう言えば、家に着く直前にあんたいたはずら電話かけてきたでしょ？」

「電話？」

「そ。ケータイから。女の子使ってクロスとか言わせて」

「俺は電話してねえ…ってか、ストーカー女に盗まれて、奪い返すために揉めてざっくりやられたんだぞ？」

怒り混じりにそう答えた祐は、治療を終えた手を撫でる。

「それで怪我？」

「ああ。包丁振り回して、マジで殺されそうになったから、携帯電話も奪い返せずに逃げた。しかもその女、さつき死んだし」

「…は？死んだ？」

訳のわからない言葉に、香が眉根を寄せる。

「途中、遮断機の下りた線路抜けて…追っかけて来たその女が走ってきた電車に轢かれた…即死だっつて、救急隊が言っつたのを見て帰ってきた」

長い付き合いなだけに、彼が嘘を言う時は特有の癖があるので嘘ならば香は気付けた。だが、今それを告げる彼の言葉に癖の行為は見られなかった。

それに気付いて、香は表情を失い蒼白した顔で祐を見る。

「…た、祐…じゃ、じゃじゃじゃじゃ、じゃあ…あの電話」

オカルト物が大きっ嫌いな香は、無意識に祐に縋り寄って、言葉も上手く喋れず涙目で相手を見る。

祐の方は、険しい表情のまま泣きそうな幼馴染の頭を軽く撫でる。

「心配すんな。どうにかする」

「ど、どうにかって…」

陰陽師や^{エクソシスト}被魔師でもあるまいしと、言葉が続けようとした彼女の言葉は続かなかった。

リビングの窓を破壊する激しい衝撃音で。

硝子が砕け散る音共に、閉ざされたカーテンが風ではためく。

揺らぐ隙間から覗く夜の世界に浮かび上がった物に、香は絶叫して祐にしがみつく。

「ちっ、しっこい女だな」

恐らく人であった物のなれの果て。

右半分の頭が原型もなく潰れ、削られ潰れて変形した顔は、二人を見てニタリと笑う。

左側に直角に九十度曲がった首は根元で半分千切れかかり、体はぐにやぐにやと軟体動物のような動きでずると割れたガラスの隙間から上半身を飛びこませた。

左の腕は肘からもげ、右手には血に染まった何かを握り締め、四つん這いになって身じろぎする度に、その体の一部が崩れて落ちる。

「ミイツウケタア…」

「いやああああっ！…」

電話の声とほぼ同じそれに、香が戦慄わななくと、祐が小柄な香を支えるように玄関へ向かう。

「タアスウ…クウ…」

継るように呼ぶその声に、祐は「うぜえ」と舌打ちをする。

割れたガラスに体を突き刺す格好になっていた異形なものは、痛みも感じなければ知能も欠落したのか、自分を阻むものにも気付かずに必死で身を擦る。

遠くでサイレンの音がする。

祐は相手が動けない隙に玄関の扉を開け、足のおぼつかない香とともに外に出る。

その時、祐の耳に何とも言えない気持ちの悪い肉の千切れる音がした。同時に、ずりりと引きずるような音が聞こえる。

「逃げるぞー！」

そうはいつても、恐怖で震える香の足は上手く歩けず纏もつれ、アパート沿いの道路をしばらく歩くように走った所で腰が抜けて座り込んでしまう。

「香！立てー！」

「む、むり、ムリ、無理！祐だけ逃げて」

鋭く幼馴染を呼ぶ祐の声。だが香は首を大きく横に振る。声も震え、奥歯の根すら合わない彼女に、苛立ったように祐は舌打ちする。後ろからは、這っているとは思えない速度でスプラッターな存在

が寄って来る。

「莫迦か！置いていけるか！」

屈んだ祐は、香の体をぐつと抱きしめ、迫って来る相手を睨む。

「いい加減諦めろっ！香に手え出してみる、お前の事なんざ永久的に存在そのもの忘れてやる！」

そんな言葉でいいのか？と、恐怖の中でも変に冷静な思考をめぐらせた香だったが、あと数歩程度の距離にまで近付いた相手は不意に動きを止める。

「…ヤダ…ヨウ…タスク…」

思いの外、効果できめんだった言葉に、悲しげな顔を見せた元人だった存在は、祐を見つめる。香の事など眼中にないかのように。

「スウキイナアノ…ド、シイテ、ワワワワタシ…ダダダダダメ？」

言葉すら満足に離せなくなっている相手を、祐もじっと見下ろす。香も恐る恐る相手を見る。グロテスクな存在になってまで、追いかけて来る女の子。ストーカーになるくらい、祐の事が好きだったのだろうと思うと、恐いけれど憎めない気分になってくる。

「惚れた女以外に興味はねえし、優しくもしねえ。お前だからじゃねえ。初めからそう言った。分かって付き合っただけで別れただろ」

刹那、恐怖も忘れて、香が人でなしな幼馴染の胸を怒り任せに叩く。

「あんだ、女の子の気持ちなんだと思ってるの！一途に好きだったという気持ち弄んで、死んじゃってからも、いっぱい怪我しているのに追いかけるくらいあんだの事、好きにさせといて！ちゃんと、この子に謝りなさいっ！莫迦祐！」

猛抗議を受けて、祐は難しい顔をしながら呆れた様に溜め息をつくと、地面に伏せた相手を見る。

「…悪かった。片想いの辛さは分かったのに、お前に悪い事をした…」

「ごめんなさいの「ご」の字も満足に言った事の無い俺様男の素直な謝罪に、香は思わず目を見張る。

それは言われた本人も同じだったようで、顔の半分潰れた相手は、泣きそうな顔で笑う。

そして、握っていた右手を祐に伸ばし、そっと掌を広げる。

そこには、血に汚れてはいたけれど傷の付いていない祐の携帯電話。祐はその手からそっと自分の携帯電話を掴む。

力なく手を下ろし、次に彼女は香に視線を向けた。

「…ア、アアアアリリリガガ、ガ、ガ…ト…ゴ…メ……………」

そう言って、相手は完全に動かなくなった。

しばらく二人はそのまま動けず、事前に祐が通報した警察が来るまで、ただそのまま動かなくなった相手を見つめていた。

十

死体が動いたと世間が大騒動になって数日が経ち、慌ただしかった祐と香の生活も、ようやく普段と変わらなくなった。

色々恐い目にもあったが、二人は彼女の葬儀に出た。出棺まで見届けた後、制服姿のまま二人帰り道を歩いていた。

「あの子：死んでまであんたを追いかけるなんて、本当にあんたが好きだったんだね：こんなろくでなしなのに」

「うつせえな」

不満げに、祐が唸る。

執念かもしれない。ただ好きで好きで、その一念で、心が歪んでストーカーになって。

彼女がした行為は決して褒められることではないけれど、彼女が祐を好きだったという気持ちこそ非難するつもりは香にはない。

「で、あなたの好きな子って誰？あんたが人に優しくするなんて気持ち悪いけど、一度見てみたいわ、その相手」

「：鏡でも見る」

ぼそつと呟いた祐に、香は意味が解らないと首をかしげる。

物分かりの悪い相手を引き寄せて、彼女を抱きしめる。

「な、ななな何？」

「解るか？俺の心臓、動いてないの」

何の冗談かと思ったが、そつと左胸に耳を押しあててみた香は、全く鼓動の聞こえない相手を見上げる。

そう言えば、幼馴染の顔色がずっと血色不良のまま、自分を抱きしめている祐に全く温もりがない事によつやく香は気付く。

「え、い、何時から？」

「あの事件から」

「う、うそ！？じゃ、何で動いているの？」

「…死んでも執念で生きたのは、あの女だけじゃねえって事だよ」

そう言つて、祐は香の唇に軽く口付ける。

熱の無い、冷たい口付けだった。

「俺は諦めねえ。お前を置いて逝かねえから、覚悟しろよ？」

ニヤリと不敵に笑った相手に、香はわなわなと震える。

「いやあああつ！！今すぐ成仏してえ！ファーストキスも返せえ！！莫迦祐っ！！」

泣きそうになりながら叫んだ香の声は、雲一つない空に吸い込まれるように響き渡る。

前途多難な彼女の横で、厄災を運ぶ男はただ嬉しそうに笑った。

END

VISITOR 3 (後書き)

本当は、一話まるっと短編で投稿したかったのですが、描写が描写なので、クツションを置く意味で三話に区切ってみました。

ドロドロな残酷描写ではありませんが、苦手な人は不快かと思われるので救済処置的な感じですよ。

どうしても作品がホラーになりきれなかったのは、自分の背後が怖くて仕方なかったから(笑)

閲覧いただき、ありがとうございました。

俺様ゾンビはお莫迦が大好き 1 (前書き)

VISITORの後日談で、ラブコメ調のお話で^{たすく}祐視点。全四話予定。

俺様ゾンビはお莫迦が大好き 1

「あんだ、そろそろ成仏しないの？」

俺が人生最後の日を迎えながら、この娑婆世界に踏みとどまって一週間。

テーブルを挟んだ前に座っている天羽香あめつかおりに、俺がゾンビになった事をカミングアウトして早三日。

何の態度も変わらなかった香が、咳くよつに漏らしたその一言に、俺はムカついた。

「うるせえ、ド貧乳」

「世の中の胸の小さい女子に土下座して謝れ。特にあたしに謝れ、祐たすくの莫迦」

俺は今日もこいつの家で晩御飯を食っている。

キッチンじゃなく、わざわざ居間に小さなテーブルを置いて、胡坐をかいて食べるのが、いつものスタイルだ。

今日のメニューはオムハヤシ。

味なんざわからねえとか、思うなよ？ばつちり、味も匂いも分かる。

というか、心臓が止まって体温がない以外は、いたって生きている頃と変わらない。

今の所、身体が腐って香の嫌いなスプラッターホラーな姿になる様子もない。

香はむっとしながら、スプーンで形の良いオムライスの山を突き崩して、大口で頬張る。

随分、男前な喰い方だ。俺の一口より大きいなんて、女失格だろ。

けど、何処でどんな料理をこいつが食っても美味そうに見えるから、嫌いじゃない。

事実、香の飯は上手いが、本人には絶対言ってやらねえ。

「ああ、すまん。お前は男だった」

「うるさい！あたしは男でもなければ、これでもちゃんとBカップよー！」

「マジか？見せてみる」

何、カミングアウトしてるんだこいつは…と、思いつつも、どう見ても「Aだろ？」と言いたくなる様な香の胸を確認するように見してしまうのは致し方ない事だ。

真贋を確かめるために厳しくなった俺の視線に気付いた香は、思わず胸を両腕で隠す。

「見せる訳ないでしょ！縮む！」

「縮むかよ」

「縮む！あんた限定で！」

「俺限定なら、でかくなるに決まってんだろ」

「はあ？」

「揉んだらでかくなる」

「揉ませるかっ！クタバレ、女の敵！」

顔を真っ赤にした香は、何処から持ち出したのかタバスコを目いっぱい俺のオムライスの上にぶっかける。

「ライ、俺が辛い物食えねえって知ってんだろっが。そっちよこせっ」

「それ食べないなら、明日からご飯は作らないわよ！」

「お前はオカンか」

相変わらず、俺とこいつの間にはアホみたいな会話しかない。
それが救いでもあり、焦燥になる。

“こいつは、俺の事をどう思ってやがるんだ？”

何事もなかったかのように、それまで普通に送っていた日々が此処にある。

俺はストーリーカー女に刺されて殺されて、そのストーリーカー女も電車に轢かれて死んで、ゾンビみたいなシユールでエグイ姿になって俺と香を追ってきたあの日こそ、香だつて動揺していた。

大っ嫌いなホラー映画みたいな状況が、香の間近で起こつたんだ。そのくせ、相手の女に同情して、その女の葬儀に出るとかいう香に付き合つて一緒に参列した帰り、俺は自分が死んだ事をカミングアウトした。

普通、香みたいな怖がりで泣くほどホラー嫌いの女なら、それを知ったら俺を避けるだろうし、怯えた顔くらいするもんだろ？

なのに、香にはそれがなかった。

俺が死んでいる事を香が理解しているのは、あいつのセリフからわかる。なのに俺を前にして、相変わらずの毒舌なのはどうしてだ？
怯えられたくもねえが、意味が解らない。

俺は、もう誤魔化せないくらい香の事を意識し続けているって言うのに、こいつの気持ちもさっぱりわからない。

俺様ゾンビはお莫迦が大好き 2

十

「なあ皆本^{みなもと}、天羽と付き合っているっていう噂、本当か？」

そんなことを言われたのは、中二の夏だ。

夏休み、バスケット部のきつい練習が終わった休憩時間。

サウナ状態の体育館での練習に、汗も止まらない上に身体から熱が抜けなくて気持ち悪かった俺は、校庭近くの水道の蛇口から水を流して頭からかぶった。

そんな時に声をかけて来たのは、同じ二年の佐久間だ。

確か香と同じクラスの室長だ。

頭が良くて運動神経も良い。おまけに顔もそれなりに良くて、性格も良いとか香がベタ褒めしていた野郎だ。

少女マンガに出てきそうなキャラだと、鼻で笑った覚えがあった。

「ああ？お前の目と耳は、節穴か？」

蛇口の水を止めて、濡れた頭をタオルで乱暴に拭きながら、俺は佐久間を睨む。

「その噂、結構有名だけだな？それに、皆本が天羽狙いの男を影で全部追っ払っているの、俺知っているし」

香の奴、平凡な顔をしているくせにどうしてだか、小学生のころ

からやたらにモテた。

けど、香はそれを気付いていない。

あいつが気付く前、野郎が告白する前に全部、邪魔な芽を俺が片っ端から摘んで消してきたからだ。

当然だろ。香に男が出来たら、そいつにかまけて俺の飯を作らなくなるに決まってる。

俺の安定した食生活を守るために、香に男なんか作らせる訳にはいかない。

物心ついた時から、兄弟みたいに育ってきた家族同然のあいつを、横から来た野郎に簡単にやれるかよ。

「あいつは俺の女じゃないが、俺のもんだ」

「何それ、勝手な言い分だよね」

「はあ？」

あいつも俺も片親で、一人っ子だ。あいつが俺の死んだ母親の代わりに家事を助けてくれるから、俺があいつを邪な男から守るのは当然だろ。

香には父親が居ない。だから俺が守るのは自然の事だった。

ずっと、そうしてきた。

香が、ただ傍に居てくれたらそれだけで良かった。

それが当たり前だった。

「皆本が中途半端にちよっかい出すから、天羽、女から最近、苛めを受けているぞ」

気付いていない訳じゃない。何度か、その場面も目撃している。

香に陰湿な嫌がらせをしているのは、俺を好きだと自称している女達の集まりだ。

実際、香を殴ろうとしたそいつらを止めた事もある。

けど、あいつは俺に何も言わない。告げ口も、文句の一つも。

ただ、自分でどうにかするから構わないで俺の手を跳ねのけた。中学に入った頃から、家事は手伝ってくれるが、あいつは学校で俺に余所余所しくなった。俺に向かって話しかけもしなければ、笑いもしない。

俺を頼らない、俺から距離を置いた香の態度がシヨックで、ずっと胸の中がモヤモヤして、余計に香に近付こうとする男を追い払った。

俺のポジションを奪われる気がして。

「だからどうした」

「自分のせいだって言うのに、知らん顔？ だったら、俺が彼女にいても良いよな？」

その一言が、俺の全身をザワリとした悪寒の様な、腹の底から吹きあがる熱のような感覚が駆け巡る。

「皆本が守る気ないなら、俺が守る。俺、天羽の事好きだから。天羽に、余計な手出ししないでくれよ」

言いたい事を言って、さっさとその場から消えていった佐久間に、どうしようもない怒りがこみ上げ、俺は思わず水道のコンクリートを蹴っ飛ばした。

“ ぜってえ、やるか！ ぶざけやがって！”

香の横に他の男？ 許せる訳ないだろ！

そう。香は俺にとって、家族だ。ずっと傍に居るのが当たり前で、他の誰かに香がとられるのも嫌だった。

あいつがただ傍に居てくれたらそれだけで良かった。

なのに、周囲の人間はそれを邪魔する。

だったら、俺以外の野郎なんざ徹底排除してやる。香に手出しする
莫迦女もだ。

この時から、俺の眼中には何時だって香しかいなかった。

その香に執着する感情が、『好き』だと気付くまでにさほど時間
はかからなかった。

十

「…祐？何で黙り込んでる訳？調子悪い？」

声に気付いた瞬間、俺の目の前に香の顔がドアップで見える。
思わず俺は背後にのけぞる。

いつの間にか香は小さな机から回り込み、俺を覗きこんでいた。
声をあげる失態は犯さなかったが、動いていないはずの心臓が動
揺で破裂寸前だ。

ビビるだろ、実際。惚れた女が息のかかるような間近に、不意打
ちで来たら。

「何よ。そんなに嫌がることないじゃない」

むっとしたように文句を垂れた空気の読めない女は離れた俺に近
付き、手を伸ばして俺の額に触れる。

「うーん。熱はないわね。っていうか、体温ないし」

小首をかしげて、考える香の仕草にあるはずの無い熱が身体によ
みがえる様だった。

十七歳にもなって化粧つ気もない、極めて普通の顔した女なのに、
不意に見せる表情やしぐさが可愛すぎて困る。

“こいつ、思春期の男の性欲舐めてんのか？”

いつも何でもない顔してお前と二人きりになって、手一つ出さない俺の強靱な理性だって、そろそろ限界だったのに。

このまま抱き寄せて、キスして、服脱がして、抱いて一つになりたい。

何度そんな感情を飲み込んだかしのれない。

香の眼中に俺は存在していない。香は俺ではない他の男にばかり惚れて、その恋する乙女状態のあいつの横顔をずっと見て来た。

俺には決して向けられない。そう思った。だから、家族でもないのに『家族』であろうとする事にこだわった。

幼馴染じゃ恋人には勝てない。

家族なら、恋人よりも深い関係だと…そう信じて思いこんだ。

こいつの傍に居られる言い訳を、ずっとそうやって作り続けて、告白する勇氣すらなかった自分を誤魔化してきた。

きっと依存していた。これまでずっと。

香を守ると言う名目に、家族であろうとすることに。

せめて、俺の横やりなんか通じないくらい、香を愛して大事にしてくれる奴が出てくるまでは。

そう思いながら、その時が来なければいいと天邪鬼あまのじゃくに、香の邪魔をして意地悪をして気を引く事しかできなかった。

自分が死ぬ寸前になっても、無駄な足掻きを止められず、生きることに縋りついた。

死にたくない。

香を誰かになんて渡したくもない。

あいつが迷惑だと思っても、俺は香の傍に帰りたいかった。

『祐は…父さんみたいに、居なくならないよね？』

父親の眠る棺の前で、しゃくりあげながら俺の手をきつく握り締

めてそう聞いた香に俺は約束したんだ。

『お前が死ぬまでずっと傍に居るに決まってるんだろ』

震えながら、縋りつくように指先の血の気さえ失せるほどに強く握り締めてくる香の手を握り返して、俺は香の親父さんの霊前で誓ったんだ。

例え俺が先に死にそうになっても、絶対に生きてやるって。寂しがりで泣き虫な香をずっと守る。

ただその一念だった。

俺が“活かされている”のは、香が居るからだ。

そんな理由、こいつには言えない。

誓ったあの日から、これまでの歳月、俺は香を傷つけてばかりでかなり嫌われた。

香の事だ、今は俺が居なくなれば清々するとも思っているだろう。

俺は自分の額に触れている香の手を掴んで下ろす。

「お前、俺がさっさと死ねば良いとか思ってたんだろ」

「…何言ってるの？」

「俺が死んだら、俺の親衛隊とか言う莫迦女共に絡まれる事もねえし、俺の世話もしなくて良いもんな？」

「そんな事、誰も一言も言っていないじゃない！何ひねくれてるのよ！」

そつだ。何時だって俺は香にだけは捻くれている。

素直になんてなれねえ。こうして怒りを煽らなければ、香は俺を見ない。

「だったら、俺がこのまま生きようが死のうが、お前に関係ない」

むつと怒った香は、空いた手で俺の肩を掴むと、そのまま俺を床に押し倒す。

弓道部のせいか、香は腕力だけはやたらに強くて、その動作を俺は回避できなかった。

香は俺に馬乗りになる様な格好で、俺を見下ろす。

このマウントポジションはやばいだろ。一体何の拷問だよこれ。

「関係あるわよ。口が悪くて、女癖が悪くて、性悪で、あたしのことなんて女とも思っていない、取り柄は顔だけ男の事でもね！」

「随分言ってくれるな、お前」

「腐れ縁のロクデナシな幼馴染を持ったあたしの身にもなつてよね。勝手に死んで、あたしの大っ嫌いなオカルトホラーな身体になって帰って来て、結局、何時もと何にも変わらないこととして…何なのよ、あんた」

眉間に皺をよせ、下唇をグツと咬んだ香は、俺のシャツの肩口をきつく握る。

なんでそんな泣き出しそうな顔で、俺を見る？

「そんなに俺が嫌か？」

「…嫌い…大っ嫌い」

ぼつりと香は、俺の予想した言葉を違わず呟いた。

同時に、俺の頬に温かな滴が落ちる。

「父さんみたいに…勝手に死んじゃうんだもの」

香の父親はトラック運転手だった。俺達がまだ五歳の時、雨の日の高速道路を走行中に他のトラック同士の追突事故に巻き込まれて

死んだ。

もがき苦しんだ格好の、炭みたいなお父さんの亡骸を見て以来、香はおカルトもホラーも受け付けなくなった。

自分の父親のあんな姿を見たら、当然だ。大人だって直視できなかった。

俺様ゾンビはお莫迦がお好き 4

「だからこうして、お前の傍に居るだろ」

そう言ったら、香は俺の肩を平手で叩く。弱い力で。

「だから、余計嫌い…好きな子に未練残して死んだんでしょ？なのに、なんであたしの所にずっといるの？…ちゃんと、その子の所に行って優しくしてあげなよ…でないと、あんたがこの世に残った意味ないじゃない。逃げるなんて…あんたらしく…ない…」

“駄目だこいつ…ほんつとに、分かってねえ”

この間、ご丁寧にキスマでして告白してやったのに、俺の惚れた相手が自分だつてまだ解つてなかったのか。

俺のなけなしの勇気を今すぐ返せ。

こいつ、鈍いを通り越して真正の莫迦だ。

しかも俺を自分の傍から追いやろうとする。

“完全に、脈なしじゃねえか”

なのに、俺の顔の上に幾つも滴が落ちて来るんだ？

どうしてそんな悲しそうな顔して泣いている？俺の事が大っ嫌いなお前が泣く理由なんて、何処にも無いだろ？

「何泣いてんだ、お前は」

「泣いてない」

「だったら、この垂れ流れるモンは何だ」

「うう、鼻水が目から出る…」

「俺よりホラーじゃねえか！」

誰がおもしろいこと言えなんて言ったよ。

香の目元を何度拭いても、どんどん溢れて零れ落ちるその涙が嫌だった。

「泣くな」

「だったら、もう好きな子の所、行って…でないと、あたし莫迦だから期待する…あなたの好きな子があたしだって…」

顔をあげて自分の掌で何度も涙を拭い、鼻をすすった後、香は又泣き出しそうな顔でそう笑う。

俺の頭の中は、何度も香の言葉がリフレインして思考が停止する。

“期待：？香は何言ってるんだ？”

徐々に起動し始めた脳が導き出す一つの答え。

「…あんたがあたしに優しくかったことなんてない…だから、そんな惨めな思いしたくない…最後までいい幼馴染として、あんたを笑って送り出したいじゃない」

俺の上から退こうとした香の腕を咄嗟に掴み、そのまま自分に引き寄せる。

逃したくなかった。

衝動のまま、香の後ろ頭に手を当てて口付ける。

力加減を間違えて、ぶつかる様な少し痛い色気のないキスだった。

「！ちよ、たす、く、ううんっ！」

驚いた香は俺から離れようともがいて俺に抗議の声をあげる。その唇を塞ぐ。

微かに血の味がする。たぶん、さっきぶつかった時に香の唇が切れたんだ。

けど、衝動は止まらない。

今度は声もあげられない程、深く香の腔を貪る。

はじけとんだ理性は、香の抵抗などお構いなしで、身体を擦って逆に香の体を床にねじ伏せ、何度も角度を変えて唇を重ねる。

次第に弱まる抵抗と共に、キスの合間に漏れる香の苦しそうな吐息が甘い響きを乗せる。

「っ、く、る、し…い…き、でき、な…」

ようやく聞き取れたそのか細い声に、俺はようやく香を口付けから解放する。

どちらの唾液とも解らず濡れた香の唇が扇情的に開き、香は大きく呼吸を繰り返す。

「な、なんて…エロい、ベロチュー、する、の…よ、あんたは…」

「俺はこれで酸欠になるお前の方が不思議だ…まあ、習うより慣れるだな」

キスの最中に息をする事さえ出来ない初心な香が、愛しくてしようがない。

まだ大きく胸が隆起する呼吸のまま、俺の言葉を聞いた香はほんやりとした視線で俺を見る。

「思いつきり期待して自惚れる。お前だけの特権だ」

「はあ？」

「お前を一人にはしない。親父さんの前で、お前にそう約束しただろ」

「…そ、そう…だけど…同情じゃ…ないの？」

ようやく俺の言葉を理解したはずの香が、驚きで目を見開いて凍りつく。この顔は、頭の中で情報が処理できずにパニックに落ちた時のそれだ。

俺は香の額に軽く唇を寄せた。瞼に、頬に、鼻に…そして唇に落とした口付けに、香は徐々に表情を取り戻して顔を真っ赤に染める。

「香、愛してる…お前は？」

「……好き」

俺の求めた答えとは違ったが、驚くほど素直に返って来た香の言葉に、俺はまた香にキスをする。

優しく何度も唇を重ねていくうち、次第に深くなる口づけ。

今度は香が息を忘れないよう、加減する。が、不意に香が俺を引き離す。

「ちょ、ちよっと、祐？」

「…何だ？」

「な、なんで…服脱がそうとかしてるの？」

「心配すんな。ゴムは持ってる」

「ば、莫迦っ！すぐそれとか、がつつき過ぎ！」

「お前、俺が何年我慢してきたと思ってんだ？これ以上待てるか」

突然怒り出した香だが、こっちはもう立派な臨戦モードだ。止まれる訳がない。

「祐の変態っ！鬼畜！色魔！」
「お前の初めては全部、俺が貰う。その先も全部、俺によこせ」
「あ、あたしに拒否権は！？」
「無い」
「勝手に決めるなーっ！人権侵害！断固拒否！」
「だから拒否権はねえっつってんだろっが」

十

どうあっても餓鬼の喧嘩みたいになって、相思相愛になっても色気のない俺達の関係。

まったく、笑える話だ。

あ？この後？

聞くだけ野暮っでもんだろ。

END

俺様ゾンビはお莫迦が好き 4 (後書き)

このお話で、完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500y/>

VISITOR

2011年12月29日06時45分発行